HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Three Essays on Cultural Goods Trade and Dyadic Data Analysis [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	高良, 佑樹
Citation	北海道大学. 博士(経済学) 甲第13250号
Issue Date	2018-06-29
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/71222
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Takara_Yuki_review.pdf (審査の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

様式9

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称:博士(経済学)　　氏名 高良佑樹

主査 准教授　齋藤久光

審査委員　副査 准教授　須賀宣仁

副査 教授　高木真吾

学位論文題名

Three Essays on Cultural Goods Trade and Dyadic Data Analysis
(文化財貿易と二者間データ分析に関する三つの実証研究)

経済活動のグローバル化，すなわち地域間の経済的な結びつきの深化は，その地域の文化的活動に影響を及ぼす．その影響として最も懸念されているものの一つに，文化的収束または他文化への排他性があげられる．すなわち，現在支配的な文化圏(例えば米国のポップカルチャー)の影響が浸透しすぎるあまり，他国の多様な文化的素養を抑圧するのではないか，あるいは文化の差異を強調するあまり，他の文化に対して過度に排他的になってしまうのではないかと危惧されている．こうした危惧に対して，高良佑樹氏の博士論文では，貿易の有無及び取引量の決定要因を明らかにするグラビティモデルを，音楽 CD という文化財の貿易に適用し，定量分析を行った．特に，各国がもつ文化的な背景，すなわち伝統的な音楽文化や音楽のトレンドに注目し，それら要因の役割を明らかにすることで，上記の大きな課題へのひとつの含意を得ようとする試みがなされている．本文は5章から構成されており，第1章は文化経済学の現状と上記の問題意識が記述されている．

第2章では，文化的な背景が貿易に与える影響を定量的に分析している．そこでは，伝統的な民族音楽に基づく地域分類(伝統的な音楽文化)と，国際政治に基づく地域の文化区分(音楽トレンド)を利用し，二国間で同じような文化的背景を共有しているか否かという変数を新たに定義している．既存研究においても貿易当事国間の文化的な類似性を測る変数の作成は試みられてきたが，多くは意識調査や観光者数・信用供与に関する情報など間接的な情報に基づいたものであった．一方，本研究で用いる指標は，伝統的な音楽文化やマスカルチャーの共有状況など，音楽貿易でカギとなる文化の類似性を直接的に表すもので，その点で先行研究よりも優れた指標と言えよう．これら変数を Helpman, Melitz, and Rubinstein (2008, QJE) の標本選別モデルを一般化したモデルに加えることで，音楽

の文化的背景が貿易に与える影響を計測している．188 か国を対象に 2000 年から 2006 年の平均輸出量のデータを用いて分析した結果，伝統的な音楽文化の共有は貿易の開始確率を高め，また音楽トレンドの共有が貿易の開始確率および取引量を高めることが確認された．

第3章は，本研究で使われる計量経済学的手法が潜在的に抱える問題とその克服方法について詳述している．本研究で用いられるデータは横断面標本，すなわち二国間における輸出量という形で記録されたものである．ただし，各国が輸出国と輸入国という二つの役割を持つため，形式的にはパネルデータと類似の構造をしている．したがって第2章の研究では，分析者からは観測されない国ごとの異質性を制御するため，輸出国及び輸入国固定効果という二方向の加法的固定効果を含め分析している．しかし，このようなデータ構造の場合，二方向に同じ割合で標本サイズが大きくなるので，推定量は漸近的に非ゼロの平均を持つ多変量正規分布に収束してしまう．第3章ではこのバイアスを陽表的に修正する方法を提示し，その有効性を乱数実験で確認している．また，第4章で用いられている交差的固定効果を含むモデルに拡張した場合についても併せて考察している．

第4章では，音楽 CD 貿易における取引量の非対称性に焦点を当てた実証分析を行った．取引量の非対称性は文化財貿易の大きな特徴であるが，国ごとの経済規模をコントロールするだけではその非対称性を十分説明することは難しい．そこで，第2章と同様に貿易の有無を規定する標本選別構造と取引量を説明する2本からなるグラビティモデルに，通常の加法的固定効果に加え，輸出国及び輸入国固定効果の交差項である交差的固定効果を組み込み，分析を行った．その際，因子分析の枠組みに基づき交差的固定効果を抽出した．分析の結果，加法的固定効果は，輸出国あるいは輸入国の経済規模や音楽市場規模と相関が高いことが示された．一方，交差的固定効果は，第2章で作成した伝統的な音楽文化や音楽トレンドとの関係をもとに文化的な背景からの解釈を試みた．その結果，音楽トレンドを共有する国同士で取引量が大きくなる半面，伝統的音楽文化が異なる国同士でも取引量が若干大きくなる傾向がみられた．後者は，自国にない異文化の新規性を求める傾向ととらえることができ，これが取引量の非対称性を説明する一つの要因となっている．最後に，交差的固定効果により言語や国境の共有，植民地関係の有無などが貿易に与える文化的側面を考慮することができるため，交差的固定効果を導入することで，こうした変数の貿易費用に与える影響だけを抽出できるといった副次的効果があることを示した．

第5章では研究のまとめが述べられている．冒頭の問いかけに対する一つの回答として，政治的な影響に由来する音楽トレンドの共有は文化財の取引量を増やすことから，ある国の文化があらゆる国へ無差別に普及する文化的収束の可能性が全く否定されるわけではない．しかし，政治的，経済的影響とは無関係に決まる伝統的音楽文化の共有が文化財貿易の有無をある程度決定づけ，さらに，音楽的な伝統を異にする国への新規さを求める傾向も弱いながらも存在しているため，各国から多様な音楽が提供されている限り，各国の文化がある一つの文化へ一方的に収束するということは考えにくい．

平成 30 年 5 月 16 日に，本学経済学研究院の齋藤，須賀，高木による審査委員会を実施した．委員会の評価は以下の通りである．

(1) 従来利用されてこなかった民族音楽的分類などの資料を発見し，分析対象の音楽財にふさわしい文化的関係を意図する変数の作成に工夫を凝らした点には新規性がある．
(2) 推定方法についても，バイアスの修正法及びその推定量に関する標準誤差の導出など，可能な限り頑健な統計的推測を行うための工夫を行った点は高く評価できる．
(3) 文化財貿易の分野の定量分析として，厳格な分析手法で，文化的な親密さが貿易に与える効果と文化的な新規さが貿易に与える効果の双方を同時に計測した先行研究は見当たらず，その新規性は高い．
(4) 審査員から出された問題点として，経済理論に基づいた議論があまり明瞭ではなく，理論モデルと推定結果の関係を整理する必要がある点，文化圏を構成する単位を国としているが一国内でも文化的多様性があるのではないかという点，取引される CD のデータに還流 CD などは含まれていないのかといったデータの性質に関する点，第 4 章については，十分に解釈が行われていない推定結果もいくつか残されており，考察を深める必要がある点などが指摘された

以上のような課題についても，今後の研究活動の中で，あるいは新たに取り上げる分析テーマの中で解消されていくべき課題であり，文化経済学の定量的研究として高い水準を示す研究成果であると，審査員全員一致で評価し，博士（経済学）の学位を授与されるにふさわしいと判断した．